# 翻訳という世界

船越 隆子
翻訳家

## プロを目指した理由 不完全燃焼をバネに

〈10〉

年が明けてはや1カ月がたとうとしている。

昨年は未曽有の災害に見舞われ、東北だけでなく、日本中の人が、これはひと事ではないということに気づき、それぞれがなんらかの形で意識を変えていった一年だったと思う。

今年は辰年でもあり、何か新しい「飛躍」を期待したくなる。

年末に高校時代の同級生から、「年に一つは『人生初めてのこと』にトライしようと思っている」というメールをもらった。それ、いいなと思った。

年齢を重ねるにつれ、守るものも増え、日常に流されやすくなる。新しい人やものに出会う機会も少なく、毎日がルーティンワークのようになっていく。しかも、せっかく何かを始めようとしても、まず「もうこんな歳なのに…」とつい思ってためらってしまう。

でもふり返ってみれば、翻訳の仕事に就いたのも、若いころに最初から決心を固めていたわけではない。翻訳の勉強を始めたのは、大学を卒業して一般企業に勤め出してからだった。

その理由は、実は大学の卒業式の日にあった。

その日、卒業証書をもらいながら「4年間、なんでもっと勉強しなかったんだろう」と、後悔の気持ちがどっと湧いてきた。私が通った東京大学英文科研究室は、ほとんどすべてが自主性に任され、宿題もなく、ゼミの発表は年に1度回ってくる程度。それをいいことに、専門の勉強らしき勉強もせずじまいだった。

就職してからもその思いはずっとくすぶり続け、1年後には、会社勤めをしながら夜に翻訳学校に通うようになった。このころはまだカルチャースクール感覚。大学時代にやり残した勉強をしている感じで、仕事として翻訳をやっていくという意識はあまりなかった。どうしたら翻訳家になれるのかも全く分かっていなかった。

けれどもその1年後、翻訳の勉強にもっと時間を取りたくて、会社を辞めた。別の翻訳学校に移籍し、作家で翻訳家の中田耕治先生に出会った。先生に指導していただいたことが、翻訳家に向かう礎の第一歩となった。

中田先生の授業はユニークだった。生徒が予習してきた訳文を集めて、片っ端から読み上げる。誤訳を指摘したりしない。ほかの人の訳を聞いていれば、自分の訳のまずさや間違いは一目瞭然だった。

また、先生からは「どんなことでも体験してみる」という姿勢を教わった。その言葉どおりに、山歩きから、俳句作り、映画、美術展の鑑賞、果ては小説を書くことまで、さまざまな体験をさせてもらった。

知識として知っていることと、実際にやってみることとは全然違う。

俳句を自分で作るとなると、四季折々の季節の移り変わりや風景、生き物たちの変化を、敏感に感じ取らねばならない。映画も、画面の中には、監督の意図しない無駄なものは一つもないはずという意識で見れば、背後の棚に置かれた花瓶にまで意味が見えてくる。

そんなふうに鍛えられながら、初めてもらった翻訳の仕事は短編小説だった。それ以降は、翻訳仲間から紹介されて、ホテルのスタッフ向けのマニュアルを訳したり、海外ドラマの吹き替え翻訳を手伝ったりした。

英国の作家ジェフリー・アーチャーの「めざせダウニング街十番地」をドラマ化した作品の吹き替え翻訳が、映像翻訳の第一歩だった。思えば、そのプロダクションが、素人同然の私を映像翻訳者として育てようとしてくれたのは、本当に幸運なことだった。それは、その後のNHKの海外ドキュメンタリーや教養番組の翻訳へとつながった。

単独で1冊の本を訳して出版したのは、翻訳の仕事を始めて15年以上たち40代半ばを過ぎてからだ。目の前の仕事をなんとなく続けてきたという、のんきな性格のせいもあるだろう。でも、遅いスタートではあるが、その分、それまでの長年の経験や思考を生かして、より納得できる作品になったのではないかと思う。

だから、スロースターターもそう悪くはない。突っ走っていた若い時では見過ごしてきたかもしれないものを、じっくり自分の中で熟成させて生かしていくことができる。

先の友人が言ったように、いくつになっても「何か一つ新しいこと」を！ さあ、今年は何を始めようか。困難の多いこんな時だからこそよけいに、前を向いてチャレンジしていきたい、と思う。

（徳島市在住）

船越さんが翻訳した海外ドキュメンタリー番組の台本

## 出会いと経験生かし成長